

オリヴィエ・ブルドー

諏訪哲史
(特別ゲスト)

伊藤達也
(司会・通訳)

究極の愛と風変わりな家族

ブルドー 本日はこのように歓迎していただきましてありがとうございます。多くの方がデビューしたばかりの私の話を聞きに来てくださり大変驚いています。

伊藤 二〇一五年に刊行されたブルドーさんのデビュー作『ボージャングルを待ちながら』はフランスで大変な評判になっています。四つの文学賞を受賞し、売り上げ総数五十万部を超えるベストセラーとして、書店やスーパーマーケットの書籍売り場、駅の売店など至る所に並んでいます。すでに漫画化と舞



オリヴィエ・ブルドー氏

台化もされ、来年には映画化されることも決っています。九月に集英社から日本語訳も出版されたので、日

本でもきつと多くの人に読まれるだろうと思います。

この作品の内容については、後に作家の諏訪哲史さんとともに伺うとして、まずブルドーさんご自身について少し伺ってもよろしいでしょうか。プロフィールによりますと、この作品で作家になれる前には、色々なお仕事に就いてこられたということですが、どういうお仕事をされていたのでしょうか？

ブルドー とても簡単な質問ですが、答えは非常に長くなります。もともと私は学位というものを持っていません。中学を中退してから、私はずっと学校とは縁がない生活を送ってきました。そのため様々な仕事に就いてきました。階段掃除をしていたこともあり、不動産屋に勤めていたこともあります。大抵どの職場でも仕事ぶりは良くなく、例えば不動産業ならば家やアパートを販売しなければならぬのですが、自分はそういうことがむしろ苦手でした。それから、グランドの塩田で働く塩職人、天然の塩を海水から作る仕事もしていました。水道管の詰まり物の清掃の仕事もしていました。思い返すと、これは世の中に存在する最も不条理な仕事の一つではなかったかと思っています(笑)。

伊藤 それらの仕事をしながら、急に書こうと思われたのですか。小説を書き始めるきっかけが何かあったのでしょうか？ブルドー 私が十八年間育った家にはテレビがありませんでした。これは今思えば非常に良かったことですが、当時としてはとても辛いことでした。一般的に子供は学校でテレビの話をするので、私は学校での会話から取り残されていました。そのせいか友達が多く、代わりに暇な時間がたくさんありました。その結果非常に良かったのは、自分ひとりの時間が持っていて、想像力を膨らませることができたことです。

同時に読書に興味を持ちました。家にあった両親の蔵書を読んでいくうちに、それを書いた作家たちに対する尊敬の念が生

まれてきました。書くことのきっかけがあったとすれば、家で読んだ作家達への敬意があったと思います。もともと実際作家になってみると書くことは楽しいだけではなく、これ以上ない苦悩でもあります。作品を書き上げ、原稿を最初の読者に渡す時の震えるような緊張感。ただ、私の人生は失敗続きで、あまり人から褒められたことはなかったのですが、書くことに关しては「悪くないね」と褒められたことがあります。実際生まれながら私に与えられた数少ない褒め言葉は書くことに對してだけでした。

伊藤 その時に読んでいた作家の名前を教えてくださいか？

ブルドー 子ども時代には、もちろん漫画も読んでいましたが、漫画から文学へ移る時、最初に好きになった作家は、コナン・ドイルでした。『シャーロック・ホームズ』シリーズです。初めて絵がない本を読んで、楽しさで眠気が吹き飛ぶ感覚を味わった経験でした。実際には自分の両親の蔵書がかなり多いものだったので、そこにある本を手当たり次第に読んでいききました。有名人や歴史上の人物の伝記をよく読んでいて、例えばヤニック・ノア^②の伝記ですとか、歴史的にはそれほど重要というわけではない人物の伝記も読みました。その後にいわゆる古典的な文学に近づいていきました、おなじみのバルザックやモパッサンなどです。それからステイヴン・キングなども読みましたね。

伊藤 小説は何歳の時に書き始めましたか？

ブルドー 親が家にコンピュータを買って来た時です。それは私が十七歳の時でした。コンピュータが家に来たのを見て、私はなぜかこれで小説を書こうと思ったのです。それで実際にコンピュータの前に座って書き始めました。五人の登場人物を想像して、色々なエピソードを書きましたが、うまくいきませんでした。タバコを吸うばかりで。最終的には作品を完成させ

られませんでした。それ以降、小説を書くことと十年ほど試みていました。その結果学んだのは、登場人物を思い描くだけではなく、登場人物に肉付けをしていくことが重要だということでした。例えば、登場人物は現在の設定だけでなく、その過去までも考えておかねばならないこと。それが必ずしも作品の中に書かれてなくても、過去があるということを背景に感じさせなければいけません。そのためには作家の頭の中でそれを作りあげておかねばならないのです。実際にはその十パーセントしか書けないけれども、書かれていない千のディテールが自分の頭の中にあり、その一部が作品になる、そういうことも段々分かってきました。

伊藤 『ボージャングル』が一番最初に書かれた作品なのですか。

ブルドー 『ボージャングル』を書く前に、構想に二年、執筆に二年かけた小説がありました。それは五百頁くらいの長編小説で、『ボージャングル』とは違って暴力的なものでした。また少しシニカルなところもありました。それを四年かけて執筆したことが人生で何かを成し遂げた最



ブルドー氏／伊藤達也氏

初でした。その作品を書いている時は、毎日朝五時半に起きて書くことを自分に課していました。自己を律して、自分自身が自分の師であり生徒でもあるという状況に自分を追い込んで書きました。そうやって完成した作品を色々な出版社に送りましたが、どこからも良い返事はもらえず、また新たな挫折を経験することになりました。その経験があったからか、『ボージャングル』を書いた時は、比較的すんなりと短い期間で書き上げることができました。

伊藤 『ボージャングルを待ちながら』は子供の視点から描かれた風変りな両親の話なのですが、物語の中の子供は、ブルドーさんと重なるのでしょうか。この小説に自伝的な部分はあ

るのでしょうか？

ブルドー 実際に自分と似ている部分はほぼありませんね。自分が受けた教育はこの物語の中とは違って非常に厳格なものでした。物語の中で両親の浮世離れした暮らしも自分の育った環境にはありませんでした。ただ強いて言えば、二つだけ共通点があります。子供の家にテレビがないこと、子供が学校での授業に全くついていけないということです。私は一応十五歳までは学校に通っていましたが、学校で行われていることが理解できませんでした。皆さんにご理解していただけるかわかりませんが、自分はそういう状況でした。

伊藤 小説の中で描かれている両親とブルドーさんの御両親とも共通点はないのですか？

ブルドー 実際、自分の両親は物語の両親とは似ても似つかず、母親は朝からカクテルを飲んだりしませんし、小説の中に



オリヴィエ・ブルドー氏

は古いレコードをかけて踊るシーンがありますが、実際の母親は、結婚式の時などには踊ることもありますが、毎日踊ることはありません。父親に関しても、小説を書くかと思っただことなど一度もない厳格な人でした。この物語の父親のようにやさしい人だったことはありません。父にはほかに良い点はありませんが、小説中の人物とは全く違いますね。

伊藤 この小説の中では子供の視点から両親の行動が描かれていて、子供の知識では、大人のやっていることが理解できません。最初のシーンでも、親の職業が子供の頭では理解できず、そのことによってユーモアが生じます。実際には残酷な部分もあるお話ですが、子供の視点を通すことで全体がよく分らないまま、ところどころ垣間見られてくる、そして徐々に母親が精神の病を患っていることが分かってくる仕掛けです。最初から全能の視点で語るのはなく、部分的な視点から語るという手法を取られたのはどうしてでしょうか？

ブルドー 実際には意図してこういう書き方をしたわけではなく、ほぼ偶然です。構想段階で色々な主題を探していたとき、なかなか良いテーマを見つけれませんでした。スペインで執筆を開始して、色々なテーマはありましたがなかなか作品になりませんでした。ある朝いつものように五時半に起きてコンピュータの前に座って書くこうとした時に、偶然一つの文章が降りてきました。それは「これは僕に起こった本当の話だけれど、表向きの嘘と裏向きの嘘が混じっている。なぜなら人生はたいいていそういうものだから。」という冒頭の文章です。この

文章を維持したまま、以前から温めていた一組のダンスをするカップルの話を書こうというアイデアが浮かびました。書き始めてみると、最初の文章をきっかけにして、後は物語が勝手に出てきました。意識して子どもを語り手の位置にしたというわけではなく、自然にこの小説が、書いていくうちにそういうものとして出来上がってきたのです。

諏訪哲史さん登場

伊藤 それではこれから、作品内部の話に入りたいと思います。作家の諏訪哲史さんに加わっていただき、この小説の内容、その魅力、また私自身諏訪さんのデビュー作『アサツテの人』との奇妙な類似点も感じたので、そのお話も後からしていただこうと思います。（拍手）

諏訪 こんにちは。諏訪哲史と申します。僕もこの作品の冒頭部分の文章が好きです。『ボージャングルを待ちながら』は、特に、お父さんに虚言癖があること、そしてお母さんが狂気をもっていること。つまりこの小説は二つの普通ではないものが愛し合うという小説だと思いました。

小説の一番初めに「パパは鉛で蠅をとる仕事をしていた」という紹介があったて、その後に、ディテールとして、仕事道具である長い鉛を「うるし塗りの箱にしまいながら」という文章が続きます。このあたりの嘘の徹底というところがリズムとして良かった。今の箇所では読みながら声を出して笑ってしまっただけです。

ブルドー ありがとうございます。私



諏訪哲史氏

も自分で読みながら笑いました（笑）。

諏訪 そうでしたか（笑）。僕が初めて書いた小説『アサツテの人』も、吃音の主人公、つまりどちらかというとネガティブな人物が出てくる小説でした。ブルドーさんの『ボージャングル』では、お父さんもお母さんもネガティブな要素を持っているのに、小説全体が喜劇のようにも見えます。この特に喜劇のようにも見えるという点が、非常にフランス文学らしいと僕は思いました。あえて喜劇なのか、悲劇なのか読者に判断させないように書いてある気がするのですが、そのあたりは意図して書きましたか？

ブルドー 私自身が書き始める前に挫折を積み重ねていて、人生において外へ扉を開けておきたいという気持ちを持ってきました。実際に太陽を求めてスペインに移住したりもしました。私は常に人を笑わせるほうが憂鬱な気持ちにさせるよりも良いと思っています。そして自分のこれまでの人生を振り返っても、人生は笑劇であるという感じを強く持っています。

ところが今のフランス文学はその逆をやってしまったのではないかと思っています。そこでは軽い話題を深刻に見せる扱い方をしています。私のこの夫婦の物語は、複雑な問題ゆえ

に最終的には悲劇的な結末に至りますが、読者は、物語を読むことでそれを喜びに変えてほしいという思いが、意識的かどうかはわかりませんが、考え方の根本にありました。

諏訪 僕が『ボージャングル』を読んだ思ったのは、悲しきも滑稽さも全部あるということです。例えば、フランス文学ではフランソワ・ラブレールなどの滑稽文学があり、それか

ら悲劇があり、確かに現代になるにつれてそれが折衷されてくる気がするのですが、そういう伝統が全部入っていると感ぜました。僕が書いた『アサツテの人』では、書いた当時、滑稽さを伝えたいという思いが強く、悲劇らしさを伝えたくないという思いがありまして、だから誰も僕の小説を読んで「悲しい」という印象は持たないだろうと思っています。

例えば『ライフ・イズ・ビューティフル』というロベルト・ベニーニの映画があります³。ロベルト・ベニーニは、自分が収容所で殺される運命であることを自分の子供にコメディイのように見せかけて、殺されに行きます。そういうしぐさを演じる訳ですが、それが『ボーヤングル』のお父さんの去り方とすごく似ています。僕が言いたいのは、こんな風に悲劇にも喜劇にも見せられる文学というのは非常に魅力があるということです。

ブルドー 実際に自分がそういう悲劇的な場面を描くときには、書きながらなんとなく文体や語りに滑稽な部分が必要ない気がします。読者が本を読みながらあまり深刻な方に引かれすぎないよう、滑稽な要素を入れてバランスを取るように、悲惨な事が起きるときには、書きながら若干の滑稽な要素を入れました。作品を書いた時に、魔法が働いたとすると、作者が読者と同じ気持ちになったことだと思っています。

諏訪 ラストシーンは本当に素晴らしい。つまり、お父さんが、息子に悲しむのを禁じているかのように見えます。でも、「悲しんじやいけないよ」というメッセージがあるために読者はより悲しくなってしまう。

ブルドー ラストの部分には楽天的な部分もあるのではないのでしょうか。実際には悲劇的な終わり方ですが、若干の楽天主義があるのは、誰が悪かったというようなネガティブな感情が残らないこと、それから小説が終わっても「人生は続いていく」

という部分を醸し出していることです。少なくとも私はそれを表現しようと思いました。

諏訪 素晴らしいですね。もうひとつ面白いと思ったのは、子供の視点で父母を客観的に描いていることで、世界が立体的になっているんですね。そして最後にオーディエンスというか読者がこの本を読んで、泣き笑いしているところまでが、実はこの本の中にすでに書いてあるというメタフィクション性、それが非常に面白いです。

ブルドー ありがとうございます。「立体的」という言葉、初めていただきました。とても良かったので今後使わせていただきます（笑）。

諏訪 最後に父の手記の中で、母が無人の建物に入って、「この礼拝堂を見て、ジョルジュ。私たちのために祈ってくれてくれる人一杯よ！」と言います。これは物語の登場人物だった二人が逆に、読者である我々の方を描写しているという、逆転の構図ですね。

ブルドー そう解釈していただけるのはとてもうれしいです。最初に書いた時には想定していませんでした。諏訪さんの読みは私自身の読みよりも深いと思います。この小説のために色々な所で語っていますが、そういう解釈を聞いたことはないですし、あと一か月ほど講演活動が続きますが、そこで聞くこともないでしょう。非常に素晴らしい視点でした。

諏訪 僕はこの十一章で、この本自体が成功することがもう書いてあると読みました。ならば、父と母は日本に行つて東京や名古屋でダンスをするだろうという結末も書けたのではないのでしょうか（笑）。

ブルドー おっしゃる通りです（笑）。実際最後のところに、作品が出版されて、成功することが書いてありますが、友達には「こんなことは書かない方がいい」と批判された部分でもあり

ます。ですが、既にいろんな人が批判しているので、さらに批判されたとしてもそれほど恥ではないと思って強行しました。もちろん名古屋に来て踊るといふシーンを書いても良かったかもしれない。フランスに帰った時、この会話が日本で成立したことを出版社の人に伝えたいと思います。

諏訪 若い皆さんが多いので、ちよつとだけくだけた質問をしても良いですか。フランスは日本と同様、漫画の文化が進んでいる国ですが、同じフランス語圏のベルギーに『タンタン』があります⁽⁴⁾。この小説の中には「アネハヅルのマドモアゼルつけたし」というキャラクターが出てきます。それが『タンタン』でいうと「スノーウィ」のような、主人公に付き添うキャラクターで、文学というよりも、ある種漫画的な世界にも見えますが。漫画からの影響があれば教えてください。

ブルドー 漫画からはそれほど影響を受けてないつもりですが。この作品は漫画化もされているので、自分が漫画版を見て、再発見することがあるかもしれません。全然くだけた質問ではありませんでしたよ。むしろ文化的で良い質問だったと思います（笑）。

『アサッテの人』と『ボージャングル』

伊藤 諏訪さんのデビュー作『アサッテの人』はまだフランス語訳がなく、ブルドーさんにはお読みいただいていませんが、諏訪さんから『ボージャングル』との類似点と相違点をご説明いただければと思います。

諏訪 分かりました。この『ボージャングルを待ちながら』を読みまして、僕のデビュー作『アサッテの人』と似ていると伊藤さんがおっしゃるのには、納得しました。両方とも、主人公

つまり中心的な人物は語り手ではありません。語り手は、『ボージャングル』の場合は息子、僕の作品の場合は甥になるわけです。そして主人公は、『ボージャングル』の場合は父と母になり、僕の場合の叔父になります。僕の場合どうしてそういう形にしたかというと、主人公の中にある種の狂気、そして言葉の障害、吃音があるんです。ボージャングルの方は父が虚言癖といいますが、常に嘘をついている人で、母は狂気を持っています。それを第三者の息子の目から見ている形になっています。

僕の小説で非常に重要な要素は吃音です。『アサッテの人』はそれがもとで言葉に対する憎悪を抱いた人間の物語です。そういう理由で僕の小説は、ややネガティブでベシミスティックになっていったのですが、『ボージャングル』は違っています。また、『ボージャングル』では語り手の息子が、鏡文字を書いたり、文字を認識する能力に障害があるところも違います。僕の場合は、正常な人間に、ある種の狂気の人間を観察させたのですが、この『ボージャングル』の場合は、一家全員が何らかの障害を持っていて、その障害の中に同一性が無いというユートピアみたいな構造があると思ったのです。

僕が興味深かったのは、父と母は男と女として愛し合います。それから子供が加わって家族愛が出てきますが、普通は男性が、目の前の女性を認識する場合、毎日その女性はその女性だと確かめることで愛することができません。けれどもこの小説では、奥さんの呼び名を日替わりで変えます。そういう一種の分裂があります。つまりその人はその人なのだと同定する作業を裏返して、普通の人間ではそれでは愛にならないはずなのに、その作業が愛になっている。そして息子はそれを見て書くけれども、反転した文字で書いている。あらゆるものが「逆」で物語が進んでいく。普通は分裂して愛が無くなくなるはずなのに、昨日の君ではない君を愛しているということが

この人たちの愛です。ですから毎日結婚することになるわけですね。

ブルドー まさしくその通りです。素晴らしい分析ですね。

諏訪 ですから毎日一家は離散し、集合する。それが愛だということが非常に面白いです。

ブルドー 自分の小説について、思ってもいなかった解説を諏訪さんがしてくださるので、わざわざ飛行機に乗って日本にきた甲斐がありました。最初の登場人物の話に戻りますと、違いがもう一つあるとすれば、諏訪さんの小説の中では、主人公が吃音の状態を耐え忍ぶのに対して、私の小説では、幻想の中に生きることを選択する。マージナルな状態を自ら選びとるという部分にも違いがあるのではないかと思います。

ジョルジュという主人公の父が、毎日ファーストネームが変わる女性を愛するということは、逆に言えばその人の変化する全ての局面を愛するという究極の愛の形でもあります。どんな人間でも人を愛するとき、相手のあらゆる側面を愛するという形で愛を表明するのではないかと考えました。全ての人間がそういう部分を持ち、対象の全てを愛したいと思う時がある。そうすることによって普通狂気と思われていることと正常との境界が崩れます。その境目が曖昧になることで、かえって人間とは何かということが分かるのではないかと思いました。

諏訪 ジャン・エシュノーズの『ラヴェル』という小説があります⁵。モリス・ラヴェルという有名なフランスの音楽家の晩年の伝記ですが、その中で彼は認知症なのか、段々と文字が書けなくなっていくきます。ブルドーさんは文字が読めない子どもだったということを聞きましたが、『ボーヤングル』の語り手も同じような状況です。僕の場合は、言葉というものにある種、絶望したところから文学が始まっていますが、ブルドーさんはどうして前向きなのか。単なる楽天主義ではない気がする

んです。それは諦めではなくて強い意志がないとできないはずで、その意志をどうやって培われたのかを、お聞きしたいですね。

ブルドー 実際私には、学校時代に文字が書けないという問題があり、挫折を積み重ねてきました。そのときの私には二つの対処法がありました。一つは困難に負けてしまうこと、そしてもう一つはそれに立ち向かうことです。実際自分は、困難が大きければ大きいほど、夢を大きく膨らませ、上を向いて、前向きに歩いて行こうという気持ちを持ちつづけました。

今はこの小説のおかげで世界中を旅することができるようになりましたが、国によりに関心事が違うようです。ある国では家族の問題であったり、ある国では学業の失敗の問題であったり、ある国では虚言癖の問題であったりします。日本の場合は楽天主義について興味を持っていただいているようです。最終的には楽天主義の哲学者を自任できるくらいにはなれるかもしれませんが（笑）。ただ私自身は哲学者でもインテリでもないの

で、そういう様々な機会を通じて、自分の作品の様々な読み方に会おうことができるのが嬉しい限りです。

諏訪 とても印象的なのは、第四章で父と母が出会う場面です。まだ結婚する前の母が、乱痴気騒ぎの後、父とドライブをするシーンで「もっと速く！ じゃないと、あなたの嘘に迫いつかれる！」と叫ぶところ、ここが素晴らしい。つまり、虚言癖に迫いつかれそうになる、追いつかれてはいけなから自分の狂気がそれよりも先に行くという状態ですね。このようにして先頭を走る母、それを虚言で追いかける父、そしてそれを見ているデイスレクシアの息子という三人三様の隔たり、距離があるからこそ、それを詰めようとする愛が生まれます。

最後は悲喜劇と言っても良い終わり方をすると思いますが、これはそれぞれが、それぞれに追いついたことで終わるのでは

ないかと思います。つまり僕は悲劇的な結末と取るよりも、追いつかれて良かったと思うんです。父は母に追いつき、そして父の手帳を見つけて出版までこぎつけることで息子が父に追いつく、そしてこの本を手取る我々読者もこの小説の中に巻き込まれながら結末に到達する。結末で全ての距離がゼロになるので、僕は一種の大団円になっていると思います。

ギリシャ神話で、オルフェウスが冥府からエウリュディケを連れ戻す帰途、戒めを破って後ろを振り返りますね。そして地獄から彼女をつれては帰れなくなるけれども、愛はそこで利那的にはありますが成就する。地獄で成就するんですよ。それと同じ感動がある。

ブルドー 本当に素晴らしい分析です。自分は諏訪さんの教養レベルに達していないので、その分析を展開する能力がないのが残念です。ただおっしゃることは非常に嬉しく受け止めています。

作家の日常

伊藤 ブルドーさんから諏訪さんに何か質問はありますか？

ブルドー 諏訪さんの『アサツテの人』はまだフランス語訳がないので、作品へのコメントができないのが残念ですが、作家の先輩として、書くための工夫、例えば毎日の執筆の習慣について、急に書き始めるだとか、インスピレーションを待つだとか、何か決まりごとがあれば、お聞きしたいです。

諏訪 僕は特別なことは何も。ただ本を読むことが好きなかだけの人間だったんです。

ブルドー それも我々の共通点ですね。

諏訪 そうですね。それから僕は映画を見るのも音楽を聴くのも好きです。また少し奇妙に思われるかもしれませんが、他人が書いたものを自分の声で録音してそれを聞くのも好きなんです。それにノイズミュージックやお経、つまり色々な音を聞いて、それを自分の中に貯め込むようにしています。そうすると、母語である日本語が自分の中で混乱を起こします。そこから出てくる病気にかかった日本語、あるいは狂気にかかれた日本語、そういうものがじっと育つまで待つというやり方です。

ブルドー 実際それも共通点です。私も毎回文体を変えようと思っと思っていますから。諏訪さんの場合はそれを続けて来られたのですね。私の第二作は来年一月に出ますが、デビュー作とはかなり違ったものになっています。実際一番簡単なのは同じ物語を書くことですが、内容も変え、物語も変え、文体も大きく変えました。それが吉と出るか凶と出るかは、神のみぞ知るです。

諏訪 少し聞きかじったところでは、二作目はゲランドの塩田が舞台になるということですね。偶然ですが僕は最近『岩塩の女王』という小説を出しました⁽⁶⁾。同じ塩ですが、海の塩と山の塩という違いがありますね。

ブルドー 告白します。諏訪さんの作品を盗作してしまいました(笑)。次の作品を出す時にはまた参考にさせていただきます。ありがとうございます。いつも参考にさせていただいてるんです(笑)。

諏訪 (笑) 幻の第一作目は、暗い小説とおっしゃいましたね。ロマン・ノワールみたいなものですか？

ブルドー 出版されなかった第一作目は、確かにそれほど明るくはない小説でした。今回の小説は深刻なテーマを軽いタッチで描きましたが、最初の小説はテーマも深刻で、書き方も深刻でした。決して出版されないでしょうから少し内容について明かしてしましましょう。五百頁の小説でしたが、ある出版社か

らは二百頁削れと言われ、別の出版社からは四百頁削れと言われました。この小説は、少し『ボーヤングル』と似たところもあり、子供と母親の話です。主人公の子供がいて、その親が不動産業で成功して相当なお金持ちです。母親は非常に威圧的で、子供を虐待し、自由に外出することを禁じます。また母親が人種差別的な発言をしたりするので、「政治的に正しくない」小説でもありました。あるとき親が交通事故で亡くなり、子供に莫大な遺産が残されます、すると子供は莫大な遺産ゆえに、現実と向き合えなくなります。お金を大量に持っているために、人間としてはどんどん悪くなっていくというアンチ・ヒーローの物語です。この小説の中で、だんだん家族は崩壊していきます。ところがお金を使い果たした時から、子供は逆に良くなってくる、天使のようになってくる、そういうお話でした。最初は『金魚症候群』というタイトルをつけました。理由は金魚には、大きい水槽に入れておくと大きくなり、小さい水槽に入れておくとさほど大きくならない性質があるからです。もう一つ考えたタイトルは『黄昏の利子』というものでした。出すとしたら最初のタイトルを不採用にして、二つ目のタイトルにしようかとも思っていますが、いずれにせよ一番初めに書いた小説はそういう内容でした。

伊藤 諏訪さんの場合は最初に書いた作品がすぐに出版されたのでしょうか。

諏訪 『アサツテの人』は僕の二十代の終わりに書きましたが、僕の先生にだけ読ませて他の人には読ませずに何年もしまっておきました。その後先生が亡くなったというショックもあり、人に読んでもらおうと思ってある賞に応募しました。

ブルドー それで出版してもらえなくなったのでしょうか。諏訪 そうです。日本では文学賞をとってデビューすることが慣例になってしまっているんです。

ブルドー そのようですね。東京で対談した川上未映子さんもそうおっしゃっていました。

諏訪 そこで僕が聞きたいのは、出版業界、それから読者という世界がありますが、僕ら日本人からすると、フランスという国は、文学に対して非常に手厚いというか、とても大事にしている国のように見えます。フランス人たちは、ベンチに腰かけたり、芝生に座ったり、電車の中でも、分厚い本を読んでいます。それに比べて日本では本が衰退したと僕は不満に思っています。ブルドーさんはフランスで本を出されて、何か不満はあるのでしょいか。つまり読者がもう少しこうしてくれたらとか、出版社がもう少しこうしてくれたらというような、つまりちよつとした愚痴を聞かせて欲しいのです。

ブルドー 東京での川上さんとの対談でも、日本では賞をとらなければデビューできないとか、その賞のために五千とか六千の作品がセレクションされ、そこから選ばれた人だけがデビューできるとか、そういう大変な状況というのは聞いています。フランスでも実際に作品として書かれた原稿のうち活字になるのは一パーセントくらいだという話もあります。またフランスには本の定価販売を義務づける法律があり、価格も自分たちでは設定できず、すべての本を誰もが買えるよう、低く設定しなければならぬという問題があります。フランスでは現在、本の販売は良書を普通の人たちに届けようという地方の小さな書店の努力に支えられています。最近ではフランスでも『ハリー・ポッター』のような読みやすいものが売り売れて、若干の不満もあります。しかし私は六日間しか日本にいませんが、たとえば日本の都市部にある六階建ての大型書店などはフランスにはありませんので、日本は恵まれているのではないでしょいか。こういう書店の存在は、日本にはまだ多くの読者がいることの証拠ではないでしょいか。

諏訪 フランスの十九世紀の詩人、ステファヌ・マラルメが「世界は一冊の書物に至るために作られている」と言いました。つまり「完全なる一冊の本」、それに向かって、我々文学者はみんな文学空間の中で書いている。つまり個々の作家は外から見るとライバルに見えるけれども、僕の中では、皆で一冊の本を書いているという気もしています。

ブルドー まさしく、我々は同じ目的を持っているといえるかもしれません。作家の目的は、最適な単語の選択、正確な描写、完璧な文章の追求という点で共通しています。実際文章を書くときには、正しい意味を、正しいやり方で書き、正しい目的を伝えるという、三つの側面があり、それにより完璧な芸術を目指します。音楽や他の芸術も同じでしょうが、完璧な作品に向かって全ての作家が進んでいくというヴィジョンには同意します。

諏訪 僕は音楽に嫉妬を感じます。たとえば音楽家なら僕とブルドーさんは会ってその日に同じ曲をセッションできるはずですよ。

ブルドー そうですね。

諏訪 でもバベルの塔が壊れた後、言葉という障害ができてしまつて、それができなくなった（笑）。

ブルドー 私はそれほど音楽家には嫉妬しません。ただ十四歳から十八歳の頃はギターやピアノが弾けたりすると、女の子にもてるという理由で音楽家には嫉妬していました（笑）。実際本が書けたとしても女性にはあまり魅力はないようです。ただ音楽は集団的なものです。私は孤独な人間で、孤独な時間が自分にとっては重要です。音楽は必ず聴く人を必要とし、演奏することが必要です。私は孤独の中にひたっている状態が好きで、それが自分にとっての贅沢です。それこそが文学の特権だと思っています。

諏訪 今のお話の中で、孤独という言葉が出ましたが、僕も実はそう思っています。というのは、もう死んでしまった過去の作家を、我々が読んで共感できるのは、残された本を通じて過去に孤独の時間を持っていた人間がいたと確認できるからです。海外の作家が書いた本の翻訳を読んだと思うことができます。その人の孤独を本の中に見つけることができるからです。つまり孤独者が海の向こうの孤独者へ手紙を出す。あるいは死んでしまった昔の作家の孤独を今の読者が受け取るように、孤独の交通から文学はできていると思います。

ブルドー すばらしい分析です。逆説的なのは、一方では孤独で苦しんでいる人たちもいるということですが、私は孤独こそが最も大事と思っています。モンテーニュの言葉に「自分自身との友情を育まねばならない」というものがあります。まさにそういうことです。もちろん孤独だけでは人は生きられず、他者が必要ですが。時々何時間かふと一人になりたくなる時があります。今回の来日でも、東京から京都に行く新幹線の中で、一人でタバコを、日本の電車だと吸えるので、吸いながら景色を見、そして本を読む、そういう時間が私には必要です。作家は孤独を利用して作品を作っていきますから、常に人に取り囲まれている作家はあまり良くないのではないかと思います。

諏訪 全く同感です。

ブルドー 今日は、孤独を愛する二人が一緒に時間を過ごせましたね（笑）。

質疑応答

伊藤 それでは質疑応答に移ります。

学生 作家であるお二人にお聞きしたいのですが、本を書く際

に自分が書きたいように表現できない時があると思うのですが、そういう時はどうされますか？

ブルドー 聴衆の皆さんの、ちょうど目の前にペンケースをお持ちの方がいて、そこに *rien à écrire* 「何も書くことがない」とフランス語で書いてあるんですが、時々まさに同じ気持ちになることがあります。パソコンを前にして、何も書くことがないし、何も書くことができないし、自分の書きたいように書けない、そういうことがあります。これは作家としての普通の感情であるかもしれないので、気にしないようにはしています。

諏訪 僕はシンプルで、直ぐボツにするか、書けるまで待ちます。

ブルドー それはラディカルですね。

諏訪 いえ、冒頭で『ボー・ジャングル』を書いた時、「言葉が降りてきた」とブルドーさんもおっしゃいましたが、それと一緒に一言二言の言葉が出てこない時は、もう失敗が見えています。ブルドー 私は作家として諏訪さんほど経験がないので、もう少しするとそういう態度を身につけていくのかもしれない。聴講者 この小説のタイトルを付けられたときに、ベケットの『ゴドーを待ちながら』のことを考えられましたか？

ブルドー 実はタイトルをつけた時には、そのベケットの本は読んでいませんでした。作品が世に出る時に、ジャーナリストからその質問を受け、まさか文学に携わっている人間が知らないのは恥ずかしいし、友人がたまたまその本を持っていたので、それをテレビインタビューの前にあわてて読みました。作品としては気に入っていませんでした、とお茶を濁しているのですが、最初は、まったく独立したタイトルのつけ方でした。ひょっとするとどこかでタイトル自体は聞いたことがあったのかもしれませんが、作品の中身とは関係がありません。

聴講者 先ほど電

車で本を読んでいるとおっしゃいましたが、どういう本でしょうか。同時代の作家ですか。今お読みの本について教えていただけますか？

ブルドー 今読んでいるのはフランスの作家ミッシェル・ウエルベックで、ちょうどフラマリオン社から二巻本の全集が出たので、それを読んでいるところです。⁽⁸⁾ モーパッサンの作品を全部読んだことは別

にして、作家の全集を読むことはあまりありませんが、他人のものの見方を総合的に見られたという点で非常によかったです。ウエルベックはラヴクラフトについて語っていて、幻想文学は、あまり読んでいなかった分野ですが、ちよつと読んでみようとという気持ちにもなっています。ウエルベックの持っている孤独感、西洋の文明の没落の悲惨さを語る中にユーモアが漂っているところ、そういう部分にとっても惹かれています。

聴講者 諏訪さんの小説はフランス語には訳されていないようですが、英語などの他の言語に訳されていますか。

諏訪 ノルウェー語と中国語とハンゲル語には訳されています。英語とフランス語はないです。本当はフランス人に読んで



質疑応答の様子

欲しいんですがね。感覚的に、フランス人ぐらいしか僕の小説を分かってくれない気がします(笑)。

聴講者 諏訪さんの話の中でも、孤独が分からない人間には文学と人生が分からないという話が出ました。昔読んだたぶんトマス・マンの『トニオ・クレーゲル』の中で主人公が、自分と同じ孤独の感覚を持った人を見分けられるというのがありました。ある健康な人を見て、この人には孤独が分からない。たとえばとても美しい女性がいても、孤独が分からないから心を開くことが出来ない。ところが少し病気を持っている感じの女の子がいて、自分と気が合うのではないかと直感する、そういう感覚です。そこでお二人に質問ですが、他人を見て、この人は孤独を持っていることを感覚的に見分けられますか？

ブルドー 私自身は他人の孤独を見分ける能力は持っていませんが、フランス語に「愛は二人で孤独になることである」という諺のようなものがあり、私の人生にはそれがとても当てはまります。私にはガールフレンドがありますが、彼女も非常に孤独を愛する人で、私自身も孤独を愛しているので、二人でいるときも、二人して孤独であり続けることができ、とてもうまくいっています。とはいえ、実際には会話はしていますので心安心ください。二人して孤独を愛するとはいつても、一日中無言というわけではないですから(笑)。

諏訪 僕も見分けられないです。ただどんなに健康的で、おしゃべりで、美人な方でも孤独を持っているはずで、それを自己欺瞞で自分にはそういうことではないと思ひ込ませている人と、素直に自分の孤独を認めている人がいるのではないのでしょうか。結局人間は必ずどこかに孤独を持っているので、文学が普遍的であるのはそのためだと思います。

ブルドー すばらしい結論ではありませんか！ 今日はとても楽しかったです。

諏訪 僕も楽しかったです。どうもありがとうございました。

(二〇一七年十一月一日、名古屋外国語大学七〇一教室・及び
アリアンスフランセーズ愛知フランス協会にて、
編集協力：若山和宏、小松彩佳、片山翼、加古夏海
編集・注 伊藤達也)

注

- (1) フランス西部ブルターニュ地方の塩田。九世紀以来塩職人の手作業によって天然の海水から「ゲランドの塩」が生産されている。
- (2) Yannick Noah (一九六〇) フランスの元男子プロテニス選手。一九八三年、全仏オープン男子シングルスで優勝。父親はカメラマン人のプロサッカー選手。母親はフランス人。
- (3) 『ライフ・イズ・ビューティフル』(一九七八年) ロベルト・ベリーニ監督・主演のイタリア映画。第二次大戦下のナチスによるホロコーストをユダヤ系イタリア人親子の視点からコメディ的に描き、アカデミー賞三部門に輝いた。
- (4) ベルギーの漫画家エルジェ作『タンタンの冒険』。スノーウィは主人公タンタンの相棒の白い犬。
- (5) ジャン・エシュノーズ『ラヴェル』関口涼子訳、みすず書房、二〇〇七年。
- (6) 諏訪哲史著『岩塩の女王』新潮社、二〇一七年。
- (7) Stéphane Mallarmé (一八四二―一八九八) 十九世紀フランス象徴派の詩人・批評家。代表作に『半獣神の午後』『骰子一擲』『ディヴォオガシオン』等。リセの英語教師として生計を立てながら、前衛的な言語表現を追求した。*Le monde est fait pour aboutir à un beau livre* (「世界は一冊の美しい本に到るために作られている」) はジュール・ユレの文学者へのアンケート(一八九一年)に収められている。
- (8) Michel Houellebecq (一九五八) フランスの小説家。代表作に『闘争領域の拡大』『素粒子』『ロンサローテ島』『服従』など。イスラム教徒の大統領がフランスに誕生する未来社会を描いた『服従』発売日に特集記事を掲載したシャルリー・エブドへの襲撃事件が発生し、小説の発売は延期。作者には護衛が付けられた。現在世界的に最も注目されているフランス人作家。